

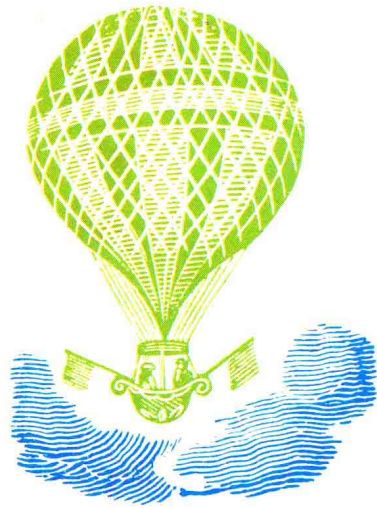
アルプス気球の旅

NHK取材班



アルプス気球の旅

NHK取材班



はじめに

「毎年、6月の末、スイスの山の中に集まって、気球でアルプスを翔んでる連中がいるんだが、NHK特集でやりませんか、絵になりますよ」と、ジュネーブ駐在の、木村太郎記者から、提案があったのは、1977年の春のことであった。

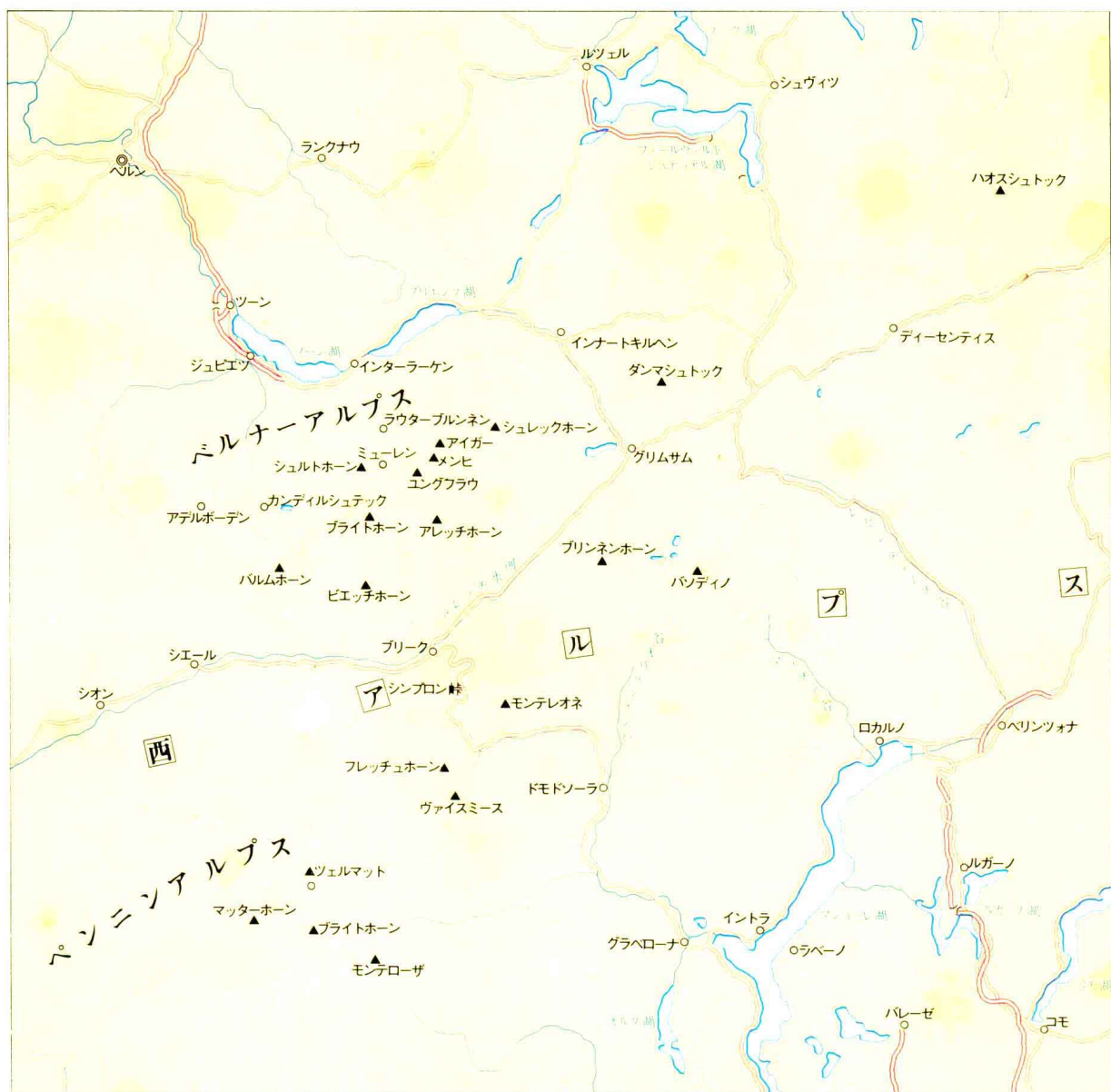
「へえー、気球でアルプスをねえ、面白そうじゃない。で、それは例の熱気球ってヤツかい？」

「そうじゃないの、水素だよ、水素」

「えっ、水素？もしもし、だいじょうぶなの、それ？」

アルプス1万尺を、飛行機やヘリコプターでなく気球でふわりふわりと渡っていくという、この話には何か途方もない想像力をかきたてるものがあつた。それは、ひとつには4000メートル級の山々の、白銀の尾根を、風のまにまに漂っていくという冒険への想いであり、もうひとつは、そうした旅が可能にする、映像の世界への期待——ゴンドラという新鮮な角度からの、揺れのないシャープな、アルプスの映像、そしてもうひとつ、山々を越えてとぶ気球自体の、被写体としての魅力——である。

しかし、この取材が実現するまでには、それから1年、1978年の6月まで待たなければならなかった。



いちばん大きな問題になったのは、水素ガス気球に、“電気のかたまり”である。テレビカメラ機器を、積みこむについての安全性の問題である。

機器のどの部分に、どの程度の静電気が発生するか。それが水素ガスに引火する可能性、その遮閉の方法。また、飛行中の気球はその操作の過程で、どの方向に、どの程度の水素ガスを放出するか、その時の空気と水素ガスの混合比は、どの程度になるか? etc.

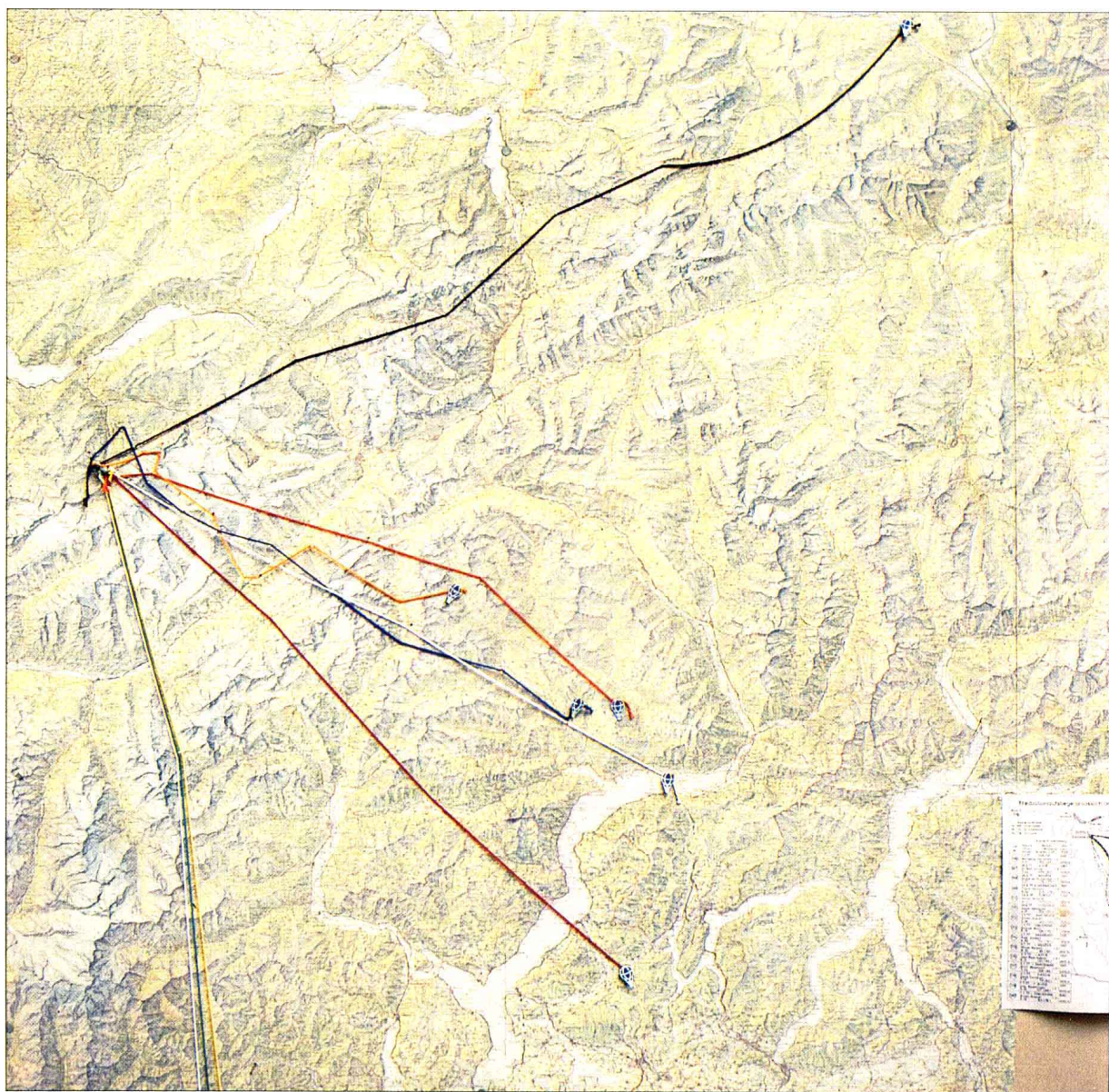
また一方では、アルプス越えバルーニング・ウィークなる、この集まりは、どのような性格のものなのか（この点は、この写真集のために寄せてくれた、ドルダー会長のメッセージ後出—にくわしい）、は

たして確実にアルプス越えに成功するという保証は、あるのか? などなど。

安全の問題は、NHKの技術陣を、またバルーニング・ウィークについては、木村特派員の手をわずらわしてある程度の見通しを得ることができた。

ただし、必ず、アルプス越えに成功するかどうかは——飛んでみなければわからない。それがまた、冒険たるゆえんでもあろう。

かくて1978年6月はじめ、わたしたちは、2台のカメラ、VTR 収録機など800キロの機材と共に、スイスの村、ミューレンへ向かって旅立ったのである。



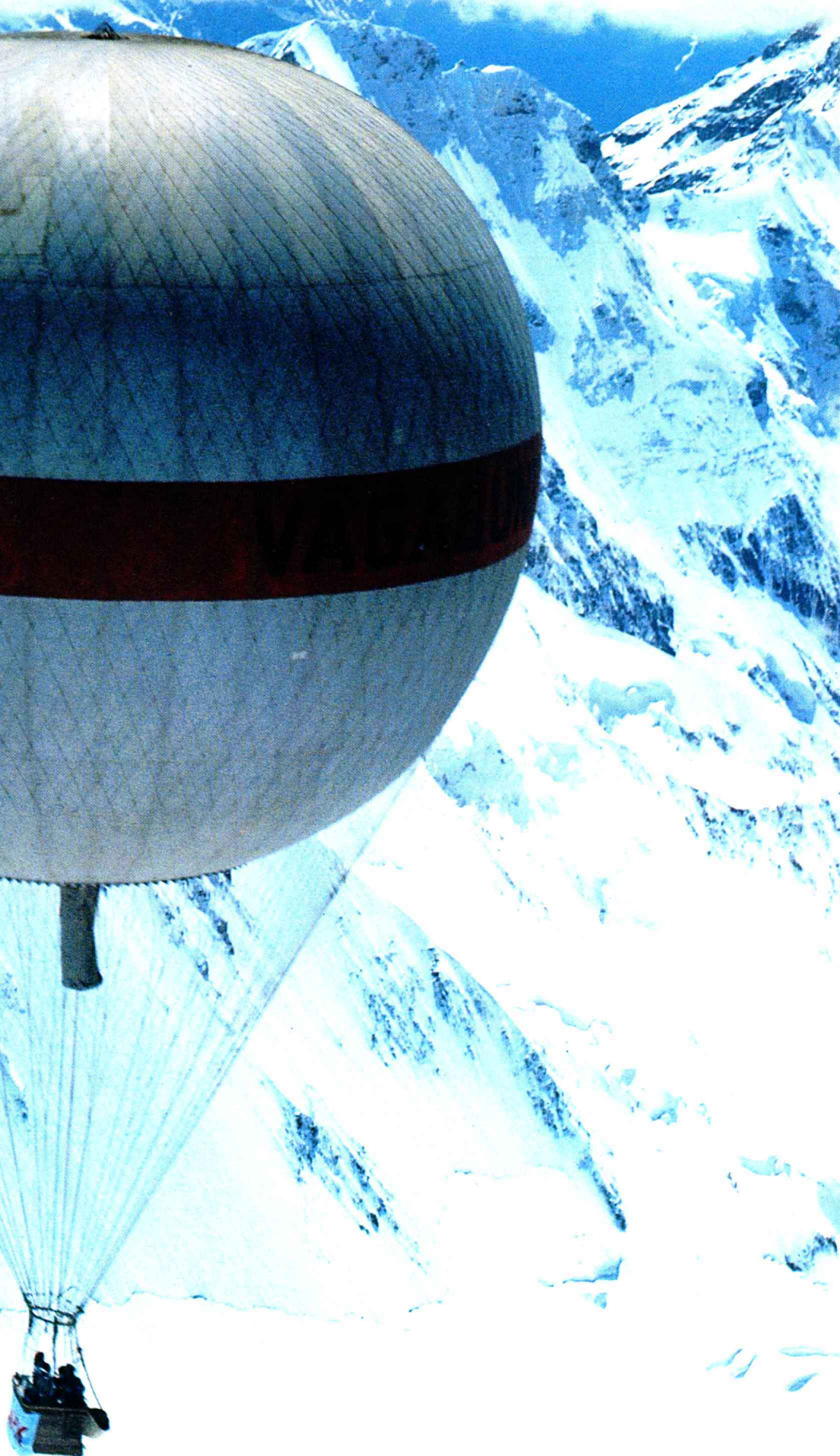
ドルダー会長からのメッセージ	12
競技について	13
気球野郎たち	16
気球の飛ぶ村ミューレン	20
出発の朝	30
飛翔のとき	48
アルプスの山々	54
アルプス三山越え	66
氷河を越えて	73
ロカルノの町へ	89
着陸の一瞬	96

装丁・レイアウト 土方弘克

写真 スギムラスタジオ(山崎美喜男)

取材チームが乗っている
バガフント(放浪者)号











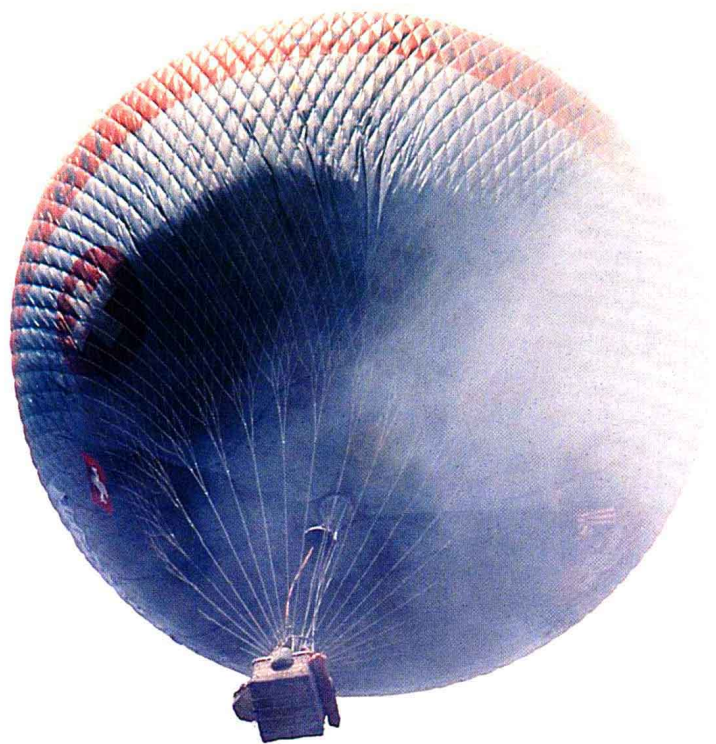
ときは6月。『気球の村』ミューレンはおそい春が、いま、
たけなわ。長い冬から甦った陽差しを、大人も子供も、
精一杯たのしんでいる。



右 ミューレンから見おろしたラウターブルネンの谷
間は、氷河がつくりだした、いかにもスイスらしい景観
だ。深い谷底は、牧草のみどりのじゅうたんがしきつめ
られている。







冒險への旅立ち——。気球は操縦
性能を持っていないので、自分で
自分の方向を決めることはできな
い。いったん離陸してしまえば、
そのあとの運命は——“神のみぞ
知る”。



ドルダー会長からの メッセージ

私は、自由気球を愛しています。気球は私にとって、こよなき“スポーツ仲間”なのです。気球に乗ると、おそらく、大海をゆく航海者が感じるであろうような、自由の感情を、味わうことができるからです。——それも、海でとは違った三次元的な世界で——。無窮の、捉え難いものの世界が、そこには、ひろがっているのです。

また、気球に乗ることで、私は、私の客となった人々に、そのような幸福な体験を分かちことができましたし、その上に、多くの親のない子、貧しい子、病気の子供たちに、ささやかながらも、援助の手を、さしのべることができました。(註)

註 ドルダー氏は、気球による飛行をする時に、出発地の郵便局のスタンプを押したハガキをゴンドラに積んで行きこれに更に、“風のまにまに”漂着した、着陸地点のスタンプを押したものを、コレクターに売って、子供たち救済のための資金を作る事業を続けている。

私は過去30年の間に、500回以上のフライトを行ない、恵まれない子供たちのために、総額400万フラン以上の金を集めることができました。イタリアやオーストリア、イスラエル、そしてカナダ・インディアンの村に「子供の家」を設立することができたのはまったく気球あつてのことでした。

そういったことを別にしても、気球で飛ぶことは、私にとっては、詩(ポエジー)です。この点で私のもっともうれしいことは、1962年に私が創設した国際高層アルプス・バルーニング・ウィークが、すっかり定着したことです。

とくに、17回目を迎えた昨夏は、はるばる日本から、NHKのテレビチームが取材に来られ、極東の数百万の人々に、このバルーニング・ウィークの一部始終を紹介されたことは、17年にわたるわれわれのパイオニア的仕事が、徒労ではなかったということで、大変うれしく満足に思っています。

このバルーニング・ウィークは、毎年少数の選り抜かれた気球パイロットと、何人かの冒険



好きな乗客で、ヨーロッパの高層アルプスの真中を、気球で旅するという、筆舌につくしがたい体験の場を設け、これを必ず成功させることで、スポーツとしての自由気球の復権を目指しているものです。

われわれは、過去17回のバルーニング・ウィークで、およそ200回、アルプス上空にフライトを行ない、いずれも無事故で、イタリア、フランス、オーストリア、ドイツ、リヒテンシュタインそれにスイス国内に着陸させることができました。そして、このような飛行の成果を通じて私がもうひとつ誇りに思っていることがあります。

それは、アルプスの高層気象の研究への寄与ということです。バルーニング・ウィークのパイロットたちは、自らと乗客を、安全に、快適に、着地地点まで飛行させることを、第一の任務としていることは当然ですが、そのほかに彼等は、飛行中、20分おきに空の気象状態、気圧、温度、湿度、風向、風速、雲量などを観測、記録して、のちに詳細なレポートを提出することを、義務づけられているのです。

これまでの200回の飛行で、記録され、集積された、これらパイロットの気象データは、普通では手に入らない観測資料として貴重なものであり、高層アルプスの気象解析に、かけがえない貢献を果しつつあります。

こうした意義のある成果を、着々とあげつつあるにもかかわらず、アルプスのような険しい山々の上空を気球で飛ぶことは、決して易しいことではありません。従って、毎年行なわれるこのバルーニング・ウィークは、パイロットたちの技術向上のためのかっこうの場でもあります。

ここで腕を磨いたパイロットたちは、国へ帰り、世界中で気球というスポーツの素晴らしさを、より多くの人により良く分かつことができるようになります。

そうやって、気球というスポーツが、世界中の人々に理解され、愛されるようになることが私の念願です。NHKチームの素晴らしいテレビ番組と写真集によって、日本の皆様の中にも、自由気球の、良き理解者が生まれてくれれば、私にとって、これに過ぎるよろこびはありません。

競技について

〈名称——ドルダー・バルーニング・ウィーク〉
正式には、INTERNATIONAL HIGH

ALPINE DOLDER BALOONING WEEK
という。

前記のドルダー会長のメッセージにあったように、1962年にスイス人のフレッド・ドルダー氏が創設。われわれが取材に赴いた1978年夏は、17回目を迎えたところであった。ドルダー氏は12年前にホテル業を隠退して今は自適の身。気球歴42年。現在はその半生をかけた、スポーツとしての気球の普及と、技術の向上に、情熱をかたむけている。

〈開催場所——ミューレン〉

地図を広げても、おわかりいただけるだろうか？ 空港のあるスイスの小都市、インターラーケンから、南へ20kmばかり入ったところ、ユングフラウ、メンヒ、アイガーといった“アルプス三山”を見はるかす谷の上にある戸数100戸人口400人ほどの、ごく小さな山村だ。

その小さな村に、ホテルが13軒もあることでわかるように、ミューレンは観光の村である。夏は避暑地、冬はスキーのメッカ。そう、スキーファンには、むしろ心当りがある村かもしれない。3000mのアルプスの山、シルトホーンの頂上から、800mのラウターブルンネンの谷まで2000mあまりを一気に滑り降りる、“地獄の滑降”として名高いインフェルノ・スキー・レースの舞台(第1回は1928年)となる村である。

バルーニング・ウィークは毎年6月末の2週間この村のホテルの一軒を借りきって開かれる。

〈パイロット〉

パイロットは、①有効なライセンスを所持しており②過去において、50回以上、無事故でガス気球飛行をした経験をもつか、あるいはアルプス上空の気球飛行に、十分なキャリアがあると認められたもので、さらに③パイロットとして人格的にもすぐれている人のみが、出場を許可される。

われわれが参加した、第17回バルーニング・ウィークには13人のパイロットが集まっていた。スイス、独、仏、米、英、オランダと国籍もまちまちなら、職業もさまざま。医師、建築家、不動産業など自由業が多かったが、中にはバーゼル市役所の水道技師だというサラリーマンもいた。

われわれが乗った気球を操縦してくれたのはコニー・ヴォルフさんという、スイス人パイロットだった。

〈乗客——一般参加〉

乗客は、場合によっては数時間に及ぶ、高度5000から6000mでの滞空に耐え(ただし、吸入酸素は常備してある)、また山中に降りた際も、十分な耐久力をもっているという医師の証明が必要である。

〈費用〉

主催者側から、パイロットや気球を調達してもらわねばならない乗客は、参加料金として、1人当り5000スイスフランを支払う。これにはバルーニング・ウィーク期間中の14日分のホテル宿泊費と、全食費、および一般の航空機と同じ保険の費用、緊急時の災害救助費用が含まれる。

〈スタート及び飛行〉

すべての気象条件が、危険がないと判断されるときにのみ飛行が許可される。すなわち、アルプス山脈上空の雲量が、八分の二以下でありかつ、推定される着陸地帯に、雷雨のおそれがあるときではないときである。ただし、航続時間、最大高度、飛行距離については、主催者側は、まったく何の保証もしない。飛行方向についても、同様である。これらはもっぱら気流にのみ影響される。すなわち“風まかせ”だからである。——というわけで、われわれの冒険飛行の幕開きである。



飛行中に“ガス洩れ”を起こしては、一巻の終りになりかねない。ガスを包むエンベロープ（被覆）の点検は、最も入念に行なわれる。どんなに小さな破れや“ほころび”も、見逃してはならないのだ。



赤い立札に“禁煙”とある。この大会の気球はすべて水素ガスを使うため、準備中の“気球広場”も、飛行中のゴンドラの中でも、一切の火気が、厳禁となる。



禁止される“火気”は、タバコばかりではない。静電気を運びやすい合成繊維の衣類は、下着類にいたるまでダメ。我々NHK取材班が持ち込むVTR機器も、とくにバッテリーなど、火花を出す可能性のある部分は、厳重に被覆するなど、神経を使った。



水素ガス注入中のバガブント号。パイプの金属部分には、アースをとって安全を期している。この大会に参加した気球のうち、最大級のもののひとつで、容積は2300 m^3 。水素の注入には4時間余りかかる。



水素ガスの値段は、ヘリウムガスとくらべて、およそ十分の一と安いので、ガス気球には、水素がさかんに使われている。過去16回を数えるこの大会では、まだ水素ガス使用に原因する事故を起こしたことはないという。

5人のスタッフからなる組織委員会が、大会の運営に最も重要な権威と責任を持つ。この5人による会合（通称O.Kミーティング）が、その名称通り、飛行OKかどうかの結論を出す。

このバルーニング・ウィークの創始者であり、総帥である、フレッド・ドルダー会長。80才。

